

ものづくり文化について

A Study of Technological Culture

森 豪†
Tsuyoshi MORI

中野 寛之††
Hiroyuki NAKANO

Abstract The title of this paper uses the words, “ technological” and “ culture.” It makes us feel a little bit strange to connect technology and culture. This paper deals with why we feel it strange. If we want to know the reason, we have to go back to Plato. Plato explained about the structure of this world by using a maker as a model. This world is made by imitation of the real world, Idea. A craftsman makes a desk by imitating the desk of Idea. A craftsman is inferior to a philosopher who meditates on the Idea. Plato sees this world as a maker but does not respect a craftsman(practical art). This way of thinking is reflected in the thoughts of German thinkers like Kant, who place much value on culture. Their culture does not include technology. Such a way of thinking comes to Japan in the Taisho era, and is different from what Japanese have thought about the structure of this world, and technology (craftsmen).

1. はじめに

本学の総合科目に複合科目があり、2000年度より「ものづくり文化」という科目を開講している。複合科目は、時代の動向に合わせて複雑にからまる事象を学際的に考察しようという複数の講師による講義科目である。「環境と人間生活」や「産業組織と人間」などの科目とともに現代社会において考察を必要とするものとして「ものづくり」をあげ、「ものづくり文化」という科目を立ち上げた。科目名設定にあたって、「ものづくり」に「文化」という言葉を付け加えることに、いささか躊躇があった。本稿の目的は、その躊躇について考察するものである。

2. 技術としての文化

愛知県観光協会が、「愛知県の産業観光」というパンフレットを発行しており、その表紙裏に次の説明がある。

愛知県は古くから、“ものづくり”の地として、大きく発展してきました。焼き物や絞り、からくり人形といった伝統産業から、自動車や航空機に代表される

産業機械まで、その文化は深く根づき、現在もなお引き継がれています。県内には“ものづくり”に関する博物館や資料館、施設が数多く存在します。

ここに述べられている「その文化は深く根づき」という言葉の「その文化」は「ものづくり文化」と言い換えられる。そして「その文化は深く根づき」という言葉は、「文化」の特質の一つを物語っている。「ものづくり」には伝統産業から産業機械まで含まれるが、根づくものは、道具や機械などの「もの」そのものでなく、「つくる」という行為や精神である。「つくる行為や精神」の具体物として「もの」そのものがある。そしてそれらは、また博物館や資料館に収容される。収容されると、道具や機械という「もの」は、日常生活の用途を離れ、「つくる行為や精神」の具体物として、また象徴としての役割を担う。さらに美的鑑賞物にもなる。そこでは、文化そのものになる。

道具や機械という「もの」が博物館に収容されて文化が顕わになると述べたが、柳宗悦は『工藝文化』の序¹⁾に於いて次のように言う。

美術文化から工藝文化への進展、そこに私は文化の方向を感じる。何も美術を拒否するといふ意味に於いてではない。美の方向は生活との結合にあると思へる。

† 愛知工業大学基礎教育センター総合教育教室

†† 愛知工業大学大学院博士課程電気電子工学専攻

丁度焼き物がそうであるように、日常品であってしかも美的なものが、柳のいう「工藝文化」である。博物館ではなく、現実の日常生活に生きている工藝文化を考えている。先にあげた「焼き物や絞り、からくり人形」などの「伝統産業」は、「伝統文化」と言っても不自然ではない。しかし産業機械を文化と呼ぶには、いささか躊躇が生じる。

第二次世界大戦後の技術革新について述べた佐和隆光の『文化としての技術』は、「ものづくり」の技術と文化を繋げて見ようとしたものである。文化と技術の乖離について、佐和は戦前に大学工学部の増設・増員が盛んに行われたが、文科系学部の定員削減が行われたことや、戦中には大学の科学研究の目的を戦争遂行にし、理工系学生以外の徴兵猶予が停止されたりしたことをあげている。軍事技術に偏向した科学技術振興政策が、技術を日常生活から遊離させる原因になったとする。そして佐和は、柳と同じように日常生活と結びついた技術文化について、柳の「美」という言葉に対してより客観的に見た「文化」的側面について考察している。

技術あるいは技術革新は、日常生活との直接的な関連性をもつようになってはじめて、「文化」としての意味あいを帯びてくる。戦前あるいは戦後復興期の「文化」を考える際に、「技術」という座標軸はさしたる意味をもたない。だがしかし、「技術」という座標軸を抜きにして昭和三十年以降の日本の「文化」を語るわけには決してゆくまい。

技術はたんにわたしたちの日常生活のなかに、多種多様なモノをもたらしてくれただけではなかった。わたしたちのいづく価値規範あるいは世界観、そしてわたしたちの文化的営みなどの一切が、過去およそ四十年近くのあいだに、いれ替わりたち替わり登場した技術によって、まことに深刻な影響を被ってきたのである。先にも述べたように、経済の好不況の動因のひとつとして技術革新をとりあげたのはシュンペーターであった。それとおなじように、価値規範もしくは「文化」(生活様式、風俗、社会通念、制度、慣行などを含む広義の文化)の変遷の動因のひとつとしても、技術と技術革新の役割を見すごしてすますわけにはゆくまい。²⁾

技術は「価値規範もしくは『文化』(生活様式、風俗、社会通念、制度、慣行)の変遷の動因のひとつ」であるという。たとえば、テレビは生活自体を変え、考え方も変え、価値観まで変えてしまう影響力をもつ。「もの」は文化を作るのである。確かに「もの」は文化をつくる

が、「もの」をつくる精神や行為、つくる過程そのものを文化とはよべないのだろうか。

3. 文化は精神的なもの

先に観光協会のパンフレットについて述べたところで、根づく文化は「つくる行為や精神」と述べ、博物館では、道具や機械にその精神を感じ取り、柳は博物館ではなく、日常生活の「もの」に美を感じ取る「工藝文化」を唱え、佐和は特に戦後三十年代以降は、「もの」を生み出す技術が生活そのものに影響し、人間の価値規範などの内面的なものから人間の生活様式や制度、通念までの文化を変えてしまうと考えていることを述べてきた。これまでのところで、文化が精神的なものであることは感じ取られたと思うが、『文明学の構築のために』の「生態系から文明系へ」に於いて、梅棹忠夫は次のように説明している。

ここでは、文化人類学でいうところの意味で、文化ということばをつかうことにしたいとおもっております。文化人類学でいうところの文化とは、芸術とか学問とか、そういう高級文化に限定しないで、人間の生活のしかた一般をさすのでございますが、そのなかで、遺伝的、生得的に獲得された以外のもの、つまり後天的、社会的に習得されたものをさすのでございます。そしてそれは、人間精神の内面において形成された、価値の体系によってささえられているものでございます。

文化は社会的、歴史的に形成されたものでございますから、それぞれの集団によって、さまざまながいのできております。それを比較研究するところに、民俗学あるいは文化人類学が成立するのでございます。わたしどもはいままで、もっぱらその方面の研究にたずさわってきたわけでございます。

ところが、われわれの生活をありのままに観察いたしますと、われわれをとりかこんで、われわれの生活をなりたたせているのは、もとより文化だけではないことはあきらかでございます。われわれは、さまざまな道具類にとりかこまれ、複雑な機械を運転しております。巨大な建築物、道路等の施設群をもっております。そのような目にみえるもののほかに、精密にくみたてられたさまざまな制度をもってしております。これらの、人間をとりまく有形無形の人工物のすべてを一括して、人間の生活をなりたたせている「装置群」とかかんがえることができます。そうすると、人間の現実的なあり方というのは、人間と装置とで形成する一つの

系、システムであるということが出来ます。つまり現実的存在としての人間は、人間・装置系のなかの人間であるということになります。

賢明なるみなさまがたは、もうすでにご推察になさっているとおもいますが、この人間・装置系のことをわたしは文明ということばでよびたいのでございます。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
 ・・・・文化は、人間・装置系としての文明の一側面にすぎないのであって、同列におくべきものではございません。しいて文化と文明の差をいうならば、人間・装置系としての文明が具体的な存在であるのに対して、文化というのはその精神的抽象である、ということになるかと思えます。あるいは、文明は実体であり、文化はその見とり図、精神という断面への投影図であるということもできようかとおもいます。³⁾

梅棹の「文化」は、芸術、学問だけでなく、「生活のしかた一般」で、「遺伝的、生得的に獲得された以外のもの、つまり後天的、社会的に習得されたもの」である。「人間精神の内面において形成された、価値の体系によってささえられているもの」で、「社会的、歴史的に形成されたもの」である。文明は「具体的な存在」であるのに対し、文化は「その精神的象徴」であり、文明が「実体」であり、文化は「その見とり図、精神という断面への投影図」である。

文化についての梅棹の言葉で注目したいのは、「後天的、社会的に習得されたもの」という言葉と「社会的、歴史的に形成されたもの」という言葉である。これらの言葉は、「後天的、社会的、歴史的につくられたもの」と言い換えられるように思う。その文化が具体物になれば、具体物は「文明」であり、「その見とり図」が「文化」である。「見とり図」は「設計図」とも言い換えられる。これらの言葉から言えば、「ものづくり文化」は、具体的な「もの」をつくりだす「設計図」または「見とり図」である。

ここで小学館『国語大辞典』で「文化」の意味を確認しておきたい。次のような意味がある。

①権力や刑罰を用いなくて導き教えること。文徳により教化すること。②世の中が開け進んで、生活内容が高まること。文明開化。③自然に対して、学問・芸術・道徳・宗教など、人間の精神の働きによってつくり出され、人間生活を高めてゆく上の新しい価値を生み出してゆくもの。

この説明のうち、特に③の「自然に対して、学問・芸術・道徳・宗教など、人間の精神の働きによってつくり出され、人間生活を高めてゆく上の新しい価値を生み出してゆくもの」という意味に注目したい。

ここに、「文化」のもつ典型的な意味が表現されている。

4. 西欧の「文化」

「文化」の③の意味は、西欧語の翻訳語としてもつようになった意味である。特にドイツ語の Kultuur (Kultur) から大正時代の初めに受け入れた「文化」の意味がそのままと言っていいほど表現されている。Kultuur の語源は、ラテン語の「耕す」という意味の動詞コレレ (colere) であり、その名詞「耕作」が Kultuur (cultura) である。それは、「人為の自然に対する働きかけであり、人為が自然を変えていく」という意味をもつ。それは「人為が自然をつくり変えていく」と言い換えられる。西欧では、人為と自然は対立し、自然を人為がそのままにしておかないで、介入し、つくり変えていくという考え方に立つ。③の意味の「自然に対して」という意味は、そういう意味である。

ラテン語の Kultuur は、フランスを経由して 18 世紀の啓蒙主義の時代にドイツに入った。カントの時代に「耕作」という意味は、「人間精神の耕作」という意味に変化した。そして「耕作」は、「つくる」という意味であり、「人間精神をつくる」のである。③の意味の「自然に対して、・・・人間の精神の働きによってつくり出され、人間生活を高めてゆく上の新しい価値を生み出してゆくもの」という意味があてはまる。そしてこの語と意味が大正時代に日本に入り、大正教養主義を形作った。

三木清に次のような言葉がある。

あの「教養」という思想は文学的・哲学的であった。それは文学や哲学を特別に重んじ、科学とか技術とかいふものは「文化」には属しないで「文明」に属するものと見られて軽んじられていた。云い換へると、大正時代における教養思想は明治時代における啓蒙思想—福沢諭吉などによって代表されてゐる—に対する反動として起ったものである。

(中略)

文明は物質文明、文化は精神文化であるという意味に於いて、いつも文化は何か文明よりも高いものであるといふ考へがあったわけである。これは特にドイツに於ける Kultuur といふ言葉の歴史的な意味を調

べてみるとやはりそういう関係にあることが分かる。

一体ドイツに於いて文明と文化との区別が強調されたのはどうしてであるかといふと、ヨーロッパの歴史に於きまして、近代的に先駆的な意味をもったのは、イギリス或いはフランスといふ国である。ドイツはその近代文化の発展に於ておくれたわけである。さういふ点から又政治的な勢力としてもイギリスの世界経済に於ける支配的な位置の確立があつて、そのイギリス或いはフランスなどの勢力に対してドイツが如何にして自分の固有性を主張するか、つまりさういふ先進国に対して後進国が如何にして自分の位置を主張するかといふ場合に、自分の文化を特にクルトゥールと称して他のつまり英仏的な文明といふような概念を軽蔑し一層下に見るといふやうな考へ方を作ってきたわけである。(中略)

また文明が世界的な一つのものであつたのに対して、文化は国民的或いは民族的といふやうなものと考へてきた。(中略)

このヒューマンイズムの傾向は学究的な人々の間で「教養」といふ觀念から「文化」といふ觀念に変わり「文化主義」などといふ言葉もできた。新カント派の価値哲学、文化哲学がその基礎になつたのであつて、桑木〔巖翼〕先生とか左右田〔喜一郎〕先生とかがその代表であつた。その頃「文化住宅」とか「文化村」とかいふ、大正の一つの象徴である安価な文化主義が、哲学者たちの意図とは別に、流行になつてゐた。⁴⁾

「教養」は文学的・哲学的で、科学や技術は「文化」に属しないで「文明」に属するものと見られて軽んじられたとのべられている。この思想傾向が今日まで続いているように思われる。「ものづくり文化」という言葉の使用にささかの躊躇を感じさせた遠因はここにあると思う。「文化」の③の意味に「自然に対して、学問・芸術・道徳・宗教など・・・」とあつたが、その「学問」に「工学」が含まれているとは考えられない。これは、日本人の歴史から見れば特異なことである。そのことを述べる前に、この特異な思想傾向をもたらした西欧の思想的特質について触れておきたい。

5. 西欧の技術者

大正時代の教養主義は、ドイツのカントの時代の「人間精神をつくる」という意味の文化を受け入れた。その文化の語源は「耕す」という意味のラテン語であり、その「耕す」という言葉は、同時に「つくる」という意味で

あると述べた。自然と人為を対立させ、自然をつくり変えるのが文化である。そのような西欧の思想的特質は、プラトンの思想に胚胎する。

プラトンのこの世界の見方を示したのが、『国家論』対話編の机の比喩である。机には、三種類ある。第一のものが、アイデアとしての机である。二番目が職人によってつくられた机である。第三が画家によって描かれた机である。アイデアは、魂の眼によって洞察される純粋な真実の形である。感覚的個物からなるこの世の現実世界を越えたところに、永遠に変わることのないアイデアからなる世界があると想定された。この世でアイデアの摸造である個物を見て、忘れていたアイデアを思い出し、想起する。職人は、アイデアの摸造をつくり、画家はさらにその摸造を描くので、最も劣った存在と考えられた。詩人追放論といい、プラトンは芸術家に厳しい。しかし興味深いことは、プラトンの考える、この世界の事物構造は、製作者の視点から見られたものである。いわば、「ものづくり」がモデルとなっている。アイデアは、「設計図」であり、「見とり図」である。(梅棹の「文化」について述べたところで、事物の「見とり図」や「設計図」が「文化」であると述べたが、ここでは複雑になるので触れない。)プラトン以前には、生物のように、自然に存在し、生成する存在をモデルにし、「なる」という観点から、事物の構造を考える思想があつた。それは、日本の自然思想に通じるものであつた。それに対し、プラトンは「つくる」という観点から、事物の存在構造を考えたのである。

そして興味深いのは、「つくる」という観点からこの世界を見ながら、プラトンは実際に製作している者に冷やかであつた。職人も詩人も画家も低く見られたのである。アイデアの世界を観想する哲学者は最高の存在で、「手の仕事」に携わる者は低く見られたのである。ここに知識と技術の分離という西欧の思想的特質も同時に生まれた。技術と分離した学問を「自由」として「自由七科」という西欧の学問の伝統を形成してゆき、技術と分離できない知識を学問から排除していった。

中世に於いて学問は大学で行われ、技術はギルドという職人組合が中心となって担った。カテドラルの建設から絵画制作までのさまざまな「手仕事」の技術が徒弟修業によって伝承されていった。大学との接点はなかった。ルネサンスに至ると知識をもった高級職人が登場した。たとえばダ・ビンチである。彼は職人であり、技術者であつた。彼は次のような手紙⁵⁾を書いている。

名声赫赫たる殿下、兵器の大家ならびに製作者をもって自任しておる人々全部の試作を十二分に吟味致し、その発明および発明品がありきたりのものと少し

も異ならないと考慮致しましたので、いかなる他人をも顧慮することなく、閣下に私見を申し上げて、小生の秘訣を披瀝致すことにつとめましょう。なおそれらの秘訣を適当な時宜に閣下の御意のままに御用立てる一方、以下簡略に記すことどもすべてを有効に実験仕ります、

以下十か条にわたって、自分のもつ技術について羅列してゆく。第一のものを以下にあげる。

(一)小生、きわめて軽く、頑丈で、携帯容易な橋梁の計画をもっています。それによって敵を追撃することもできれば、時には退却することもできます。なお別に、堅牢で、戦火によって攻撃しがたく、あげおろしに容易かつ便利な橋〔の計画ももっています〕。また敵の橋梁を焼却破壊する方法も〔研究してあります〕。

第十には、彫刻家、画家としてのダ・ビンチが現れる。

(十) 平和な時代には、建築、公私大建築物の構築、また甲地から乙地への水道建設に、他の何びとに比べてもこの上なき御満足をいただけると信じています。

同じく、大理石、青銅およびテラコッタの彫刻をいたします。絵も同様、他の何びととでも御比較あれ、いかなることでも致します。

パトロンへの自分の「才能」の売り込みである。絵画や彫刻が技術と区別された「芸術」の意味をもちはじめるのが17世紀であるが、同じ頃にエンジニア(engineer)という語が「常人にはできないことをする特異な才能、想像力」の意味で使われるようになった。その源泉がルネサンスのダ・ビンチのような高級職人である。かれらは、領主などのパトロンに「才能」を使われたのである。

ルネサンスは活版印刷術、火薬、羅針盤などを生み出した技術の時代であり、科学の先駆けの時代である。ダ・ビンチも科学者であった。ダ・ビンチの人物、植物、動物、解剖、機械などの素描は正確な写実であり、精密な自然観察をした。そしてダ・ビンチは「数学的科学的の一つも適応されえないところには、もしくはその数学と結合されないものには、いかなる確実性もない」と述べ、観察で得た結果を数学的に表現することを考えている。その延長上に17世紀初めのガリレオの数学的自然科学がある。そして大学で学んだガリレオが観察機器を駆使していたことの意義は大きい。ここで、知識と技術が

一つになったのである。しかしそれは異端の学者のなしたことであった。ガリレオとともに17世紀の科学革命を推進したニュートンが、実験により展開した自らの思想を哲学思想と想っていたように、一般に大学では技術は受け入れられなかったのである。17世紀、数学もまだ大学でやる学問ではなかった。ケンブリッジ大学の様子は次のようであった。

どういふ書物を読むべきか、何を探求すべきか、どういふやり方で進んで行けばいいのかなどについて私を導いてくれるようなものは何もなかった。というのも(当時、われわれの間では)数学は大学で研究する学問とはみなされておらず、卑しい(mechanical)ものだと考えられていた。つまり、数学は貿易商、商人、水夫、大工、測量技師とかいった類の連中のやることだと考えられていたからである。⁶⁾

18世紀のイギリスの産業革命を民間人の発明が主導し、大学人ではなかったことを思い合わせると、プラトン以来の知識の技術に対する優位という思想は変わらなかったと言える。カントの時代の18世紀には、ドイツはイギリスやフランスに比べれば、後進国であった。そこから、大正教養主義を生む「文化」観が生じた。それは、プラトン以来の思想傾向をもったものであった。

しかしフランス革命が進行し、19世紀に至ると、変化が生じた。フランスは、19世紀初頭にエコール・ポリテクニクという技術者養成機関を設立した。産業革命は蒸気機関をはじめとする熱機関の効率化を図る理論の確立が求められるようになっていたが、そのエコール・ポリテクニク関係者であるフーリエ、カルノーは熱現象の理論化を試み、アンペールは電気力学の数学化に貢献した。19世紀後半に熱力学がドイツのクラジウスによって、電磁気学がイギリスのマックスウエルによって集大成された。共に研究施設に所属していた。特にイギリスは、「世界の工場」と言われるほどに産業革命が進行していた1851年のロンドン万国博で華々しい成功を収めたが、1867年のパリ万国博ではイギリスの製造業者の技術力の低下を意識せざるをえない結果となった。それをきっかけとして科学技術教育に国家が乗り出しはじめた。1873年にケンブリッジ大学にキャベンディッシュ研究所ができ、実験物理学教授職が設けられた。ここで、トムソンが1897年に電子を発見した。ケンブリッジ大学に工学研究所が開設されたのは、1894年であった。ようやく工学が大学の中に存立基盤をもつことができた。絵コール・ポリテクニクの設立以来、技術者養成機関は波及していったが、大学

は歴史が長ければ長いほど工学を学問としては受け入れなかった。イギリスでは、現在でも大学志願者は人文志向が強く、特に貴族などの階級やそれに近い階級に属する人は、工学部には行こうとしない。プラトン以来の伝統がまだ生きているようである。

6. 日本の技術者

日本には知識と技術の分離はない。明治維新政府は、西洋の科学技術を取り入れることに熱心で、1871年に工部省工学寮、1878年に工部大学校、1887年には東京大学工科大学校が設立された。ドイツの高等工業学校が大学と同等の地位を得るのが1899年であり、東京大学に世界最初の工学部ができた。日本に知識と技術の分離はなかった。大正教養主義は、外来の思想である。

西洋の衝撃は、なによりも黒船という技術力の衝撃であった。それには、日本人の根底にある技術愛好の性質がある。それは今も日本人の根底にあると、榮久庵憲司は次のように『モノと日本人』で言う。

モノに心がある、ということを前提とできることは高級なことではないだろうか。モノを人間から突き放して見てはいないのである。日本人はモノが好き。これはもう証明をこえた問題である。西欧でも一神教の普及以前には、日本人と同じようにモノが好き、であったようである。森羅万象に精霊が宿るというアニミズム的な自然観を、日本ではもちつづけてきたことからモノが好きなのは民族特性が生じているのであろう。モノが好きだから、モノに心を感じる。奴隷ではなく友である。友であるより神である。⁷⁾

西欧には自然と人為を対立するものとし、自然を人為によってつくり変えていくという考え方がある。プラトンは「ものづくり」をモデルとして、事物はアイデアという「設計図」を模してつくられたと言う。プラトン以前にはアイデアという本質世界と事物の世界を区別せず、一体的にとらえていた。それが、榮久庵のいう「一神教の普及以前」の世界である。この「一神教」はキリスト教のことで、プラトンのアイデアに相当するのが神で、神が自らすべてを自分の考えに従ってつくり出す。プラトンと同じ世界構造である。それに対し、日本人の思想では、世界は本質も事物も渾然としている。それが「モノ」に心があると言われる世界である。そしてつくられる道具などの「モノ」に愛着を感じる。「モノ」への愛好は、「モノ」をつくる職人への愛好となる。

司馬遼太郎は、次のように日本人の職人愛好について述べている。

職人。じつにひびきがいい。そういう語感は、じつは日本文化そのものに根ざしているように思われるのである。

日本は、世界でもめずらしいほど職人を尊ぶ文化を保ちつづけてきたが、そういうあたり、近隣の歴史的な中国や歴史的韓国が職人を必要以上にいやしめてきたことにくらべて、『重職主義』の文化だったときえいいくなる。⁸⁾

中国や韓国で職人が軽視されたのは、儒教の影響で、身を勞することは卑しいとされたからである。日本にも儒教は入ったが、職人観は変わらなかった。職人を軽視することはなかった。職人を尊んだ。それは技術を尊ぶことであり、つくられたものを愛好するということである。司馬の言う「職人を尊ぶ文化」は「ものづくり文化」と言えるように思われる。文化を人文系のみ限定しようとした大正教養主義は特異であるように思われる。

7. 自然と文化

「モノ」に心があると感じる職人の言葉だと思われるのが、次のような宮大工の棟梁の言葉である。

技術というものは、自然の法則を人間の力で征服しようというものですわな。わたしらのいうのは、技術やなしに技法ですわ。自然の生命の法則のままいかして使うという考え方や。だから技術といわず技法というんや。⁹⁾

西欧には自然を人為がつくり変えていく思想傾向があると述べたが、ここには自然を生かす人為の働きという考え方がある。この棟梁はまた「自然と共に生きているというのでなければ、文化とはいえませんな」¹⁰⁾とも言う。自然をつくり変えるのが文化だという西欧思想とはまったく異なった考え方である。

ここで注意をしておきたいことがある。自然をつくり変えるのが文化だという西欧思想と、非常に単純化して述べたが、そこから漏れる部分があるということである。自然の征服を主張したとされるペイコンにも次のような部分がある。『ノウム・オルガナム』の最終部に於ける自然哲学の提示について、次のように言われている。

ここにいたってペイコンは、これまでとはうって変

わって自然に対して驚くほどの謙虚な態度をとる。「人間は自然の僕および解説者にすぎない。人間がすること、また知ること、また知ることは自然の秩序について実際にもしくは思考のなかで観察したものだけであり、それ以上は知ること、することもできない。というも、どのような力によっても、原因の連鎖を解くことも引きちぎることもできないし、自然はしたがうことによつて以外には制御されないからである」(4. 32)。自然の征服を唱えたペイコンも、迷路のような自然界、感覚や知性の繊細さよりもはるかに繊細な自然を前にして、「自然への服従」を考えずにいられないのである。¹¹⁾

自然をつくり変える思想とペイコンのこの部分との関係については、次の課題としたい。イギリスには、経験主義の思想の流れがあり、大陸の思想と単純にイコールで結べないところがある。

そして先の棟梁の「自然と共に生きているというのでなければ、文化とはいへませんな」という言葉に関連して、梅棹の次のような考え方をあげておきたい。

人間・自然系から人間・装置系へ、つまり、生態系から文明系へ。これが私の基本的発想でございます。これはじつは、重大な観念をふくんでいるのでございます。つまり、わたしは、文明というものを、自然の延長上においてとらえているのでございます。文明の生態史観というかんがえ方もそうでございますが、文明系と生態系を一つの歴史的連続体とかんがえているのでございます。いいかえれば、きょうの主題の文明学は、自然学の延長上にあるのだということでございます。文明の研究は自然認識の一種であるとさえいえるのかもしれませんが。¹²⁾

「文明学が自然学の延長上」という言葉は、梅棹では文明学と文化学は表裏の関係にあり、「文化学は自然学の延長上」という言葉と同義である。自然を文化がつくり変えていくという思想に対する痛烈な言葉である。

8. おわりに

プラトンは、「ものづくり」をモデルにした世界構造

を考える一方で、「手の仕事」を行う、「ものづくり」をする職人を低く見た。それが、日本人にとっては特異であることを述べてきた。「ものづくり文化」という言葉に感じたいささかの躊躇の原因は、遠くプラトンに派生していた。

東西世界のあらゆる思想が過去から流れこんだ現在にわれわれは生きており、プラトンの思想に生きると同時に昔からの日本人の考え方をしている。それは、さまざまな姿となって現れているであろう。「ものづくり文化」という科目に迎える講師の先生方は、現実に「ものづくり」に携わっておられるが、そこにプラトンの世界構造を体験されると同時に、ペイコンが謙虚にならざるをえなかった自然の奥深さゆえに、「設計図」を越えてしまう体験をされているのではないだろうか。個々の講義を拝聴しながら、「ものづくり文化」について考えていきたいと思っている。

注

- 1) 柳 宗悦：工藝文化，春秋社，東京，1975.
- 2) 佐和隆光：技術としての文化，29，岩波書店，東京，1992.
- 3) 梅棹忠夫（編）：文明学の構築のために，7-9，中央公論社，東京，1981.
- 4) 柳父 章：文化，42-43，三省堂，東京，1995.
- 5) 杉浦民平（訳）：レオナルド・ダ・ビンチの手記（下），297-299，岩波書店，東京，1991.
- 6) ヴィヴィアン・グリーン：イギリスの大学，272，法政大学出版局，東京，1994.
- 7) 榮久庵憲司：モノと日本人，83，東京書籍，東京，1994.
- 8) 司馬遼太郎全集第66巻，188，文藝春秋，東京，2000.
- 9) 西岡常一：木に学べ，230，小学館，東京，1996.
- 10) 同書，106.
- 11) 塚田富治：ペイコン，173-174，研究社出版，東京，1996.
- 12) 梅棹忠夫，14.

(受理 平成13年3月19日)